

## イラク国立図書館長が綴る、バグダッドからの日記

2003年のアメリカ侵攻から4年経ったイラク。未だに解決のめどが立たないどころか、状況は悪化する一方だ。テロ行為は日常茶飯事と化しており、事実上内戦状態である。その戦闘の核心地、バグダッドから現状を伝える声がある。イラク国立図書・文書館のサアド・エスカンダー館長の日記だ。日々の実情を淡々と伝える彼の日記は、英国図書館のサイトに掲載され、世界中の注目を集めている。館長は放火と略奪で破壊した図書館を3年間で復興した。古い慣習に固執する官僚や他機関の同僚、宗教的保守派とは真っ向から対立。そして自由と民主化を推進し、革新的な制度を築き上げた。毎日のように続くテロ爆破と死の脅迫、職員の拉致・殺害、電気や電話の制限という過酷な状況で、エスカンダー館長が命をかけて守っているものとはいったい何か。



PROFILE サアド・エスカンダー | Saad Eskander

歴史学者。イラク・バグダッド生まれ。45歳。1981年にクルド人抵抗運動に参加し、4年間イラク北部の山岳で反政府活動を続ける。その後、イラン、シリアでの生活を経て、1990年イギリスへ渡る。ノース・ロンドン大学で歴史学の学士課程、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス大学院で国際関係学と歴史学の修士、後に博士課程を修了。2003年11月、バグダッドに戻り、イラク国立図書・文書館の館長に就任。破壊状態の国立図書館を3年間で建て直した。2006年12月、英国図書館のサイトで日記の掲載を始める。身の安全のため、家族は1カ月に一度住居を変えるという生活を続けている。妻と1歳の男の子がいる。

# 共通した歴史こそが 国を統一する

■ サアド・エスカンダーさん  
Saad Eskander

あなたがあるために

2003年4月、度重なる放火・略奪で廃墟と化したイラク国立図書・文書館。あらゆる設備・家具は破壊されるか、持ち去られたが、最も深刻な痛手は多くの貴重な歴史的文献が失われたことだ。略奪された資料の中には国境問題に関する重要な記録もあり、隣国へ持ち出され、売りに出されるケースも多い。



破壊の激しいイラク図書館の中央読書室。館長就任後わずか7カ月で復興し、再開した。「独裁政権崩壊後の文化的真空をイスラム原理主義に利用されてはならない」と、非宗教的な学者や学生の活動の場を提供した。

## 復興はまず信じることから始まる

■ 4月1日、インターネットが使えない。電気は9時に戻った。文化省から、アメリカ侵攻後の混乱で略奪された歴史的重要な文献が売りに出されているという連絡があった。盗人は5万ドル要求しているが、中央政府は興味を示さず、イラク国立図書にはそれを買戻す余裕の資金はない。

■ 4月2日、近所の電話会社の技師が暗殺された。他の技師達は怖がって会社には出ないだろう。インターネットはしばらくは使えないままになりそうだ。

■ 4月3日、図書館入り口付近に死体が横たわっていた。すぐに警察に連絡。救急車で死体は安置所に送られた。毎日数体の死体が身元不明として慌ただしく葬られる。自分の街で見知らぬ者として死んでいくとはなんと哀しいことであろう。このような死に方は人間を物へと変えてしまうことだ。

■ 4月4日、メールを確認するために近所のインターネットカフェに行った。安全のため普段はこのような場所へは行かないことにしているが仕方がない。メールを読んでいると、大爆発音とともに建物が揺れた。大急ぎで外に飛び出すと、空に巨大な黒煙が立ち上っている。車によるテロ爆破だ。死傷者の数はわからない。安否を気遣う妻から連絡があった。

### イラクの宗教と民族背景

イラクは、同じアラブ人でありながら宗教の違いで対立するシーア派（多数派）とスンニ派（少数派）、それに少数民族のクルド人が大部分を占める。フセイン政権はスンニ派で、シーア派やクルド人を抑圧。特にクルド人への迫害は激しく、1987年の化学兵器での攻撃は国際的な非難を浴びた。泥沼化するスンニ派とシーア派の対立を横目に、現イラク政府から分離政権を得た北部クルド人自治区は比較的安全と言われる。しかし、クルド人はトルコ、イラン、シリアなどにも分散して住む国を持たない民族。アメリカ軍イラク侵攻を機に、独立国家建設への動きもあり、反目する隣接トルコの軍事的動向が懸念されている。

### イラク年表

2003年 3月	アメリカ軍によるイラク侵攻開始
5月	ブッシュ大統領による「戦闘終結宣言」
11月	サド・エスカンダー氏、バグダッドへ戻る
2004年 6月	イラク暫定政権が発足し連合国暫定当局（CPA）が終了
2006年 5月	イラク正式政府発足
12月30日	サダム・フセイン処刑。同日、エスカンダー館長の日記の掲載が始まる

以上は、イラク国立図書・文書館（以下、INLA）のサド・エスカンダー館長の日記の抜粋である。

エスカンダーさんが、移住先のイギリスを離れ、サダム・フセイン政権崩壊後の混沌とした故郷バグダッドへ戻ったのは2003年末のことだ。安全で安定したイギリスでの生活を後に、危険で不確かな将来を選んだ。その決意の裏には何があったのか。

「他国に亡命しているアーティストやジャーナリストなどの知識人達と、20年ぶりにバグダッドに戻りました。それぞれの分野でどのように新生イラクに奉仕できるか探るためです。しかし、2週間後、まだ危険すぎると判断し、皆帰っていききました。残ったのは私だけでした。

私はすでにどんな犠牲を払ってでも残ることを心に決めていました。当時、そして、今もですが、民主的なイラクの再建に最善を尽くし、建設的な役目を果たすことは、私の義務だと信じているからです。

私は若い頃、亡き両親と3人の兄弟姉妹とともに、クルド人抵抗運動に加わり、クルド地域の山岳地帯から反政府運動を続けました。バグダッドに戻り働くという選択は、この私の独裁主義への抵抗と自由で民主的なイラクを再建するという決意の延長なのです」

バグダッド滞在中に、INLAの館長職に抜擢された。就任当時のINLAは、放火や略奪が繰り返され、破壊状態にあった。図書資料の25%、文書資料の60%もが失われたと試算されている。

「INLAはイラク全土で最もダメージが大きかった機関で、完全な廃墟と化していました。損害状況調査のために館内を視察し、職員達に挨拶をした後で、気を落ち着かせて文化大臣にこう言ったことを今でもよく覚えています。

『このような簡単な任務をいただき大変感謝しております』

大臣は笑い出し、こう答えました。

『あなたはまだ若い。事をいい方向に変えていくパワーと意志がある』

しかし、大臣は、私が役目を果たせるかどうか、いや、この地位にいれるかどうかさえ定かではないと疑っていることを感じました。

しかし、自分自身に言い聞かせたのです。意気消沈した職員達を再教育することができれば、事をいい方向に変えることは可能だと。

私が最初に手掛けたことは職員達の自信を取り戻させることでした。INLAを再建することは可能であると信じさせることでした。それからわずか7ヵ月後の2004年7月に



放火や略奪から免れた資料も水道管の破壊により多くが水浸しという最悪の状態だった。長時間の停電や予算不足のために貴重な資料の適切な収納も難しい。



早急な課題だった復元ラボやマイクログラフィック・ラボの機材提供と技術者養成はチェコ共和国とイタリアの協力を得た。イラク政府からの少ない予算を補うため、エスカンダー館長は諸外国機関との関係を大切にしている。日本からはユネスコを通して7万8千ドル(約930万円)の寄付を得ている。

## 「私は本で、国の歴史で戦う」

中央読書室を再開することができました。

復興工事が続く間も、各部署をひとつひとつ再構成し、再開していきました。イラク博物館など建物を閉鎖したままの機関もありますが、完全な間違いだと私は思います。

国立の文化機関はバグダッドの文化的生活を復興させる重要な役割を担います。また、宗教にとらわれない学者や学生達が自由に活動する場を提供します。これは、

文化的な面も含め、国民のありとあらゆる生活を管理監視してきた前独裁政権の崩壊によって発生した文化的真空をすみやかに埋めるためにも重要なことなのです」

### 極限の状況下でも人は適合する

国立図書館の再建という一大業務に着手したエスカンダー館長は、多くの様々な問題に同時に直面した。



INLA は現在400名の職員を抱える。全員が会議に出席し、発言権を持つ。また、部門ごとに内部選挙を行い、代表を決定する。「改革の鍵は女性にできることへの信頼だ」と語るエスカンダー館長は、多くの女性を雇用し、昇進させてきた。宗教的保守派の反感をかっている要因のひとつだ。

**WEB**

イラク国立図書・文書館  
<http://www.iraqnl.org/>

(上記サイトは状況によってつながりにくいことがあります)

英国図書館  
<http://www.bl.uk/iraqdiary.html>



「最初の問題は、外部からの干渉を拒むことでした。連合国暫定当局 (CPA) 時代、運営の基礎を築くうえで、私が優先したことは、何の規制もなく自由に行っていくということでした。同時に、堅苦しい管理主義や腐敗政治などからの影響を避けるために、文化省からも独立して動く必要がありました。

第二の問題は、館内に新しい制度と習慣を導入することでした。職員はまったくやる気を失っていたので、運営上の決定や実行過程で職員全員に関わりを持たせることにしました。女性労働への信頼も改革の大きな柱でした。権威主義的なやり方は徐々にリベラルで民主的なものへと取って代わりました。

第三の問題は、財政でした。国内でもっともダメージの大きかった文化機関であったにもかかわらず、INLAに割り当てられた2004年度の予算はわずか7万ドル(約840万円)でした。私はこの少ない予算を、水道や電気の修復、家具や設備の購入など、館の存続に直接関わってくるような緊要な問題に使わなければなりません。建物復興に必要な資金提供を文化省に説得するには2年間かかりました。

四番目の問題は、復元ラボなど技術職員の再教育でした。イラク図書館は他の中東諸国と比べ25年は遅れています。

最後ですが、一番重要なのは、安全の問題でした。2003年以降イラクは不安定で深刻な状態が続いています。警備員を雇い、銃や弾丸を購入し、図書館の職員には交通機関のサービスを始めました。

広く考えれば得たこともありました。4年6カ月のバグダッド生活で確信できたことは、人間は少なくともかなり適合しやすい生きものであり、極限の条件下にあっても創造力豊かにやっていけるものだということです」

**分離社会における非宗教機関の役割**

「私は本で、国の歴史で戦う」と館長はかつて語った。保守的な勢力が拡大し、宗教的、民族的な分離が広がるイラクで、国立図書館が担う役割とは何か。

「政治家は、極端な行為を生み出すのは狂信的文化だという事実をしばしば忘れて

います。宗教的テロリズムは、それが武装運動に変わる前は文化的現象として始まりました。宗教から分離した進歩的な文化を広げ、強めていくことこそが、イスラム原理主義や過激な保守思想に打ち勝つ鍵なのです。

INLAのような国立機関は、イラクの知的層が新しい思想や進歩的な理論を生み出す場所であり、暗黒で狂信的な力に取って代わる確固とした別の選択肢を与えてくれるでしょう。

忘れてはならないことは、前政権はシーアスニ、クルドの3つの主たるコミュニティを統一するひとつの国家アイデンティティを建設することができなかった、失敗の政権だったということです。

国家アイデンティティの創造は、宗教や民族の違いなく、すべてのコミュニティによって分かち合うことのできる共通の歴史的記憶の存在を機軸とします。そして、INLAやイラク博物館の古代遺産こそが、真の意味での国の象徴を代表しており、すべてのイラク人が共有する歴史の始まりなのです。

もし政治家がもっと真剣にこれら機関の可能性に注目をすれば、INLAやイラク博物館は、国民を結合させる力として機能することができます」

館長の日記には世界中から激励と感動の声が届く。状況悪化の中でも希望を失わずに前進し続ける館長の揺るぎのない意志が、読む人の心を引きつけるのであろう。

「私は常にセルフ・モチベーション(自己動機付け)を信じてきた」と館長は言う。

クルド人抵抗運動に参加し、フセイン政権による犯罪を目撃したことは館長の心に大きな刻印を残した。1990年渡英当時は英語がまったくできなかったにもかかわらず、わずか9年後には博士号を取得した。

「自分が堅固な意志を持ち、さらに、頭の固い人物であったことは幸運です」

エスカンダー館長が命をかけて守っているのは、単に蔵書なのではない。過去の歴史を守ることのでられるイラクの統一と自由である。